

かならぬ御けしきをおほきおと伊尹藤原覺しなげき御をち中納言子義懷も人えれずたゞむねつふれてのみおぼさるべし説經をつねに花山の嚴久阿闍梨をめしつゝせさせ給御心のうち道の心かぎりなくおはします妻子珍寶及王位といふ事を御くちのはにかけさせ給へるも惟成の辨いみじうらうたき物につかはせ給ふも中納言もろ共にこの御道心こそうしろめたけれ出家入道も皆れいの事なれどこれはいかにぞやある御心さまのをりく出くるはことごとならじたゞ冷泉院の御ものけのせさせ給なるべしなぞ歎き申わたる程に猶あやしう例ならずものゝすゝろはしげにのみおはしますは中納言なども御どのゐがちにつかうまつ給ほとに寛和二年六月廿二日の夜にはかにうせさせ給ひぬとのゝ略中なつの夜もはかなくあけて中納言や惟成の辨など花山にたづねまゐりにけりそこにめもつゝらかなる小法師にてつゐるさせ給へるものかあなかなしやいみじやとそこにふしまるびて中納言も法師になり給ぬこれえげの辨もなり給ぬあさましうゆゝしうあはれにかなしとはこれよりほかの事あべきにあらずかの御ことぐさの妻子珍寶及王位もかくおぼしとりたるなりけりともえさせ給

〔古事談王道后宮〕此御出家山花ノ發心ハ弘徽殿ノ女御恒徳公爲光女鐘愛ノ間忽薨逝仍御悲歎ノ處町

尻殿藤原道兼得便宜書世間無常法終時不隨者等ノ文也妻子珍寶及王位臨命等奉見被勸申御出家ノ事諸共ニ出家

御供可仕由被契申云云而令剃御首給ノ後申云大臣父兼家ニ替ラヌスガタヲ今一度ミエテ可

歸參ノ由申テ逐電スト云々其時我ヲ謀リケリトテ涕泣給云々

〔古今著聞集十三〕花山院中世をそむかせ給事のおこりいとあはれにかなし法住寺相國藤原爲

光の御むすめ弘徽殿の女御とてさぶらはせ給けるが限りなく御心ざし深かりけるにおくれさせ給て御歎き淺からず世中心細くおぼし亂れたりける比粟田關白藤原いまだ殿上人に